

八十年代の夜明けよ

つきすすもう、固いきずなで



発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話(53)3033番
(53)3034番
編集兼
発行人 前川 哲也
半年間1,200円 送料共



写真は、昨年の秋のとある夕べ、新港闘争本部で開かれた新港(三川・港務)と宮原(本所)の両地域分会同志の交流。社宅合理化に反対しどう闘うか、というテーマが中心だったが、こうして交流・話し合いによつてこそ、労働者の知恵が掘り起こされ、闘いのエネルギーが結集されてきた——三池。これからも団結を大切に、歩み続けていこう。80年代の激動のなかを。

組合員・家族、大災害裁判原告団の皆さん、さらに
CO患者・遺族を守る会会員、全国の働く仲間の皆さん、
明けましておめでとうございます。八〇年代を迎えま
した。決意をこめ、手を取り合い、前進しましょう。
一九八〇年元旦

三池炭鉱労働組合

詩

三池

夜明けの大牟田駅頭

三川指導部 杉本一男

この胸のときめきはなんだ
ひた走る西鹿見島行き夜行列車
ポケットウイスキーをくらい
寝台で寝がえりをうち
まどろんだかと思つとうつろに眼を醒す
瀬高・南瀬高・渡瀬・銀水と通過すると
特急・急行三十七本が停車する
大牟田駅はもうすぐ
新栄町がぼんやりと窓外にうかぶ
外は雨かきや寒い曇り空だ
おれの帰る先は荒尾
すがたかたちは変つても
おもいだすのは同じこと
そこが炭鉱の町で
三池のたたかいの舞台 労働者のまち
あれから二十年
静まらぬ胸のひびきが
旅行鞆をにぎる手にびりりと伝わる
ホッパーに象徴されたたたかい
それはホッパーではなく人間のたたかい
人間のダイナミックな固まりが胸を躍らせ
若者の全身を駆けた
豆タンクこと宮川陸男がいた
大田薫が熱弁をふるつた
凶刃に倒れた浅沼稻次郎が
宮本顕治が
この駅頭に立った
久保清のこと 三川炭塵爆発のこと
三池を離れた炭鉱労働者のこと
弾丸がとびかうありさま
いまたとえおぞましい転換があるとしても
黒い影となつてひた走るな
人間の声で 固いきずなで
混迷をこそつき破れ
夜は明ける
やがて夜は明ける

